

ハルシメジの梅林と共に

山田 昌之

昨年(平成16年)4月末、平日の午後、相京さんから電話をもらいました。「30分後に印西の近くを通る。沼南のハルシメジを見に行こう」と言うお誘いでした。車中からのケイタイ電話は聞き取りにくく、何回か聞き返してから大あわてで支度をし、16号線の待ち合わせ場所に向かいました。

ある会員から電話魔と言われた相京さんです。この時ばかりではなく、きのこ探して車を走らせながら、この近くには会員の誰それがいればと思うかべてはよく電話をしたのではないのでしょうか。

相京さんが何十回となく通ったに違いない沼南の目的地には迷うことなく着きました。私には2回目のところですが、その様子はあまりにも違いました。1回目のときは、梅林の下、深く茂った草の中にハルシメジがたくさん隠れていました。その梅林がないのです。むき出しの裸地の上で、巨大なキノコの様な重機が首を空に向けて動いていました。相京さんが作業員に訊ねると「送電線の鉄塔を建てている」と言う返事でした。

その翌々月、思いもよらない相京さんの訃報が入りました。親愛なる相京さん、あんなに元気だった相京さんが、突然、あのハルシメジの梅林が消えたのに合わせるかのようにいなくなってしまう、寂しい限りです。

きょうはなんかある？

吹春 公子

クマさんのような体形、手にきのご鎌、長靴、ぜったいに忘れない煙草。野太い声で「きょうはなんかある？」。挨拶の次にはいつもこの言葉がでてきた。退職後のある日、「いま佐倉での仕事が終わって」と、わたしの勤め先のある佐倉城址公園にスーツ姿で現れた。「今日はヤナギマツタケがでてるんじゃないかと思って・・・」

昼休み一緒に城址公園を歩くと、ニワトコの古木にバッチリ抱えるほど生えていた。あんなにたくさん立派なヤナギマツタケを初めて見たので、とても感動したのを覚えている。さすがにこの時は、きのこ鎌はもっていなかったが、スーツと革靴できのご狩り。本当にきのごが好きだったんだなあと思ってしまう。

相京さんを追うようにニワトコは枯れ、昨年切られてしまった。ぽっかりとした空間が広がっている。いまだ亡くなったことが嘘のようで、「きょうはなんかある？」の声がどこかから聞こえてくる気がします。相京さんのご冥福をお祈りいたします。

合掌

キノコへの私の先達

翠田 丕

「去る者は日々に疎し」とか。まだ亡くなって一年半にもならな

いのに。思えば、亡くなる一年半ほど前に私が病を得て入院していた時、見舞いに来て頂きました。それが彼と話をした最後のように入ります。以来私は体力優れず。観察会など参加しませんでしたから。彼が私と同じ糖尿病であることは知っていたが、よく居酒屋に行くようでしたし、軽いのだと思っていました。脳梗塞の病歴などは知りませんでした。いろいろ聞きかかったのでしょうか。一時間もいて帰りました。次に会ったのは亡くなられてからでした。

千葉菌類談話会に入会する機会を作ってくれたのは、彼でした。年に一回友人から富士山でエスパーのピルツを探りに誘われていましたが、それに飽き足らず中央博物館の菌類講座に二・三年通ったのでしょうか。そんなある日講義が終わると、ティピカルな容貌の紳士が「千葉県には・・・談話会があります。入会したい人は、この用紙に記入して出して下さい。」

春、はるしめじ、あみがさたけ、かしたけが出る頃、海上のキャンプ場を借りて、キノコ談義一夜を毎年のようにやっていました。主催者は相京康氏ということになっていましたが、確かに申込は彼がやり、借りる日も決まるのですが、あとがいけません。何も決まらないのです。

私は彼のお陰で随分あちこちと連れて行ってもらいました。僅かばかりのフィールドの知識の大半はこれによって得られたものです。本当に感謝しています。いくら感謝しても足りないと思います。

ご冥福をお祈り申し上げます。